
Visionary Tales

古明地覚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

V i s i o n a r y T a l e s

【Nコード】

N 3 0 4 1 Z

【作者名】

古明地覚

【あらすじ】

退屈な毎日をごしてきた高校生、如月悠人はC A Bというゲームをプレイした。彼はそのゲームを気に入り、また来たらやろうと思っていた。

しかし彼はその後、交通事故で亡くなった…はずだったのだが

気付けば違う世界にいた。

そしてその世界の学校で行われていたのは…C Wという「戦争」だ

つた。

この出来事は彼の運命を大きく変えることになる…

第一章 突然すぎる出来事にはついていけないから勘弁してほしい

「赤、青、緑、青、青、赤、最後に赤、黄、白！」

軽快にボタンを押してゲームをクリアした。

「さすが悠人。これくらいはお手の物だな。」

「当たり前。俺を誰だと思ってんだ。」

今ゲームをクリアしたのが俺こと如月悠人^{きさらぎゆうと}。15歳の高校一年生だ。

「ならあれはクリアできるかな？」

「はんつ、店内最高記録更新してやんよ。」

今俺は親友の三柱一樹^{みはしらかずき}と一緒にゲーセンで休日生活をエンジョイしている。

「上、左下、下、右上、左下……。」

画面に合わせてリズムよく矢印を踏む。

俺は豊かでも貧しくもない普通の家に生まれ、普通に育ってきた。学校での行事、日常、全てが楽しかった。

しかし、そう思えたのも小六まで。中学生になって俺は気付いてしまった。日常の退屈さに。

毎日同じように生活して毎年同じ時期に行事に参加する。まるでビデオを巻き戻しては再生しているようだった。

そんな日常を楽しくするために俺はアニメやゲーム、マンガに走った。

「下、右、左下、上、右下、上下フィニッシュ！」

「……お前には敵わねえよ。」

だけど駄目だった。ゲームをしても、アニメを見ても、マンガを読んでも日常が変わるわけなかった。一時の退屈しのぎにしかならなかった。

「そろそろ昼飯行かね？」

「もうそんな時間か。」

時計を見ると既に12時。昼飯時だ。

「じゃあそろそろ行くか。」

そう言っただけが出口に向かおうとしたその時、

「おい、最後にあれやっていこうぜ。」

一樹が一つのゲームを指差した。

またゲームかよと思いつつ一樹が指差したゲームに向かって歩いていく。

「C A B…？何だこれ？」

「新作じゃないか？」

しかし、それはゲームにしてはあまりにも変すぎた。

高さ120cmはある小さな柱のような物の上に水晶のような丸い物が乗っている。柱のような物の中央には『C A B』と書かれており、その上には100円玉投入口、下にはカード出口がある。このことからカードゲームと予想できるが肝心のカード置き場と画面がない。

…これ絶対カード販売機だろ。

「なあ、これ明らかにカード販売機だろ？」

「いや、ゲームだから大丈夫だろ………多分。」

尻つぼみになる一樹の言葉。

「自信ないなら言っちなよ。」

「うるせー。早くやるぞ。」

そう言っただけが一樹は100円を入れた。

隣に同じのがあったから俺もそれに100円を入れた。

するとカード出口からカードが出てきた。しかも5枚。

「赤字になりそうだな…。」

つまりカード一枚20円。マズいんじゃないだろうか。

そんなことを考えていると柱のような物の上の丸い部分が点灯していることに気付いた。

「ん、悠人のも点灯してんのか。」

一樹も気付いたみたいだ。

「ああ。変な光だな。」

「ちよつとぼけてないか？」

俺も一樹もその光に違和感を感じていた。あまりにも不自然すぎたから。

「…気持ち悪っ…。」

俺は点灯している丸い部分に触れた。

「っ!？」

その瞬間、目に映る全ての物が真っ白になった。そして体中を何かが駆け巡る変な感触を感じた。

それが気持ち悪くて思わず目を瞑った。

数秒経って目を開けると目の前には広大な草原が広がっていた。

「どこだここ……?」

俺はさっきまでゲーセンにいたはずなのに…。

周りを見渡すと一樹もいた。俺と同じく丸い部分に触れたからだろう。

「悠人、ここどこだ？」

「知らん。」

むしろ教えてほしいぐらいだ。

「もしかして……これ自体がゲームだとか？」

「これ自体が？」

「ああ。なんか景色が不自然なんだ。」

一樹の言う通りかもしれない。

もう一度周りを見渡すと草原しか見えないがそれらが不自然だった。微妙にドットっぽい見えるし。

「じゃあどうやって遊ぶんだ？」

「わかるわけないだろ。」

予想通りの返答が返ってきた。

ゲームということはわかったが問題はどうやって遊ぶかだ。ルー

ルがわからない以上何もすることができない。

「ん？ポケットに何か…。」

一樹がズボンのポケットを探ると中からカードが出てきた。

「それってさっき出てきたカードか。」

「みたいだ。『鎧』……『剣』……。」

一樹がカードの名称を読み上げた瞬間、カードが光り出した。

「うわっ！」

俺は思わず飛び退いてしまった。そして次の瞬間、俺は有り得ない光景を目にした。

カードが一樹の周りを回る。回るにつれて一樹の姿が変化していく。

さっきまでTシャツにジーパンの姿だった一樹はみるみるうちに鎧と剣を装備している騎士へと変化した。

「おお…。」

「す、すげえ！俺、騎士になってる！」

これでルールはわかった。

周りに雑魚モンスターやら何やらがないからこれはRPGなどではなく、対戦ゲームだ。

そして一樹の状態からして、カードを使って自分を武装して自身が闘うアクション対戦ゲーム、といったところだろう。

「悠人も早くやれよ！」

「わかってるよ！」

ルールが分かれば話は早い。こっちもカードを使って武装を……

・白黒エプロン

・時計

・メイド服

・箒

・ナイフ

……。

「どうした悠人？」

「全く勝てる気がしねえっ……！」

「まともなのが全くない。死ねと？」

「ええい、ままよ！ナイフ！箒！」

カードの名称を叫ぶとカードが光り、左手にナイフ、右手に箒が現れる。

「勝負だ一樹！」

「いや、明らかに勝敗は見えてるだろ！？」

「ナイフと箒嘗めんな！」

ナイフと箒をしっかり持つて突進する。

と見せかけて、

「秘技、箒投げ！」

箒を思いつ切りぶん投げた。

「うおっ！？」

ぎりぎりで避ける一樹。

そこに、

「ナイフショット！」

ナイフをぶん投げた。

「危ねえっ！」

そしてそれも避けられた。

……

「俺の負けだ……。」

「だから言っただろ……。」

常識的に考えてナイフと箒で騎士に勝てるわけないよな……。

「俺、カード運ないなあ……。」

「そんなにヤバいのか？」

「ああ。服と時計だからな。」

俺の知る限り、メイド服と白黒エプロンと時計に殺傷能力はない。
「それは……………」

頼むからそんな哀れみの視線で俺を見ないでくれ…。

「呆気なく終わったな。」

「ナイフと箒投げて終わりだからな。」

一樹と勝負（と言えるのかわからないが）後の余談をしていると再び視界が真っ白になった。パニックになりそうなので目を瞑った。そして目を開けるとゲーセンに戻っていた。

「もう一回やろうぜ。」

一樹が誘ってくる。しかしその前に、

「まず飯食べようぜ。」

腹ごしらえだ。腹一杯になってからリベンジしてやる……………！

「あいよ。」

一樹と一緒にゲーセンを出て歩く。そして近くの信号へ向かう。

「さっきは勝負にならなかったからこれやるよ。」

そう言って一樹は俺にカードを手渡した。

「……………『魔法』。いいのか？」

「ああ。俺には必要ないみたいだし。」

なら遠慮なく貰っておこう。これを使って俺にカードを渡したことを後悔させてやる……………！

「悠人！危ねえ！」

「え？」

一樹へのリベンジのことばかり考えていて信号が赤であることを知らず渡ってしまった。

左からは大型のトラックが来ていた。

俺は撥ねられた。撥ねられ、空中に浮いた。

ああ、これで俺の人生終わりか。

何も面白いことなしで終わるのか…。

…………… 終わり？

待ってくれ、俺はまだやりたいことがたくさんあるんだ。

なのに…終わるかよ…。
畜生っ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3041z/>

Visionary Tales

2011年12月10日19時58分発行